

寒冷地で養成したイチゴ無仮植苗の収量特性

伏原 肇・林 三徳¹⁾・三井寿一（福岡県農業総合試験場・¹⁾ 福岡県農業技術課）Hajime FUSHIHARA, Mitsunori HAYASHI and Hisakazu MITSUI :
Yield Pattern of Strawberry 'TOYONOKA' on Non-Transplanting Culture Used
Raising Plant in High Latitude-Cold Region

イチゴの促成栽培で問題となる2, 3月期の収量の中休み防止及び育苗の分業による栽培の省力化を図るためには、無仮植苗の利用が考えられる。そこで、高緯度寒冷地で養成した無仮植苗の定植時期や定植時の苗の大きさが、収量特性に及ぼす影響について検討した。

1. 材料及び方法

供試品種として「とよのか」を用いた。北海道十勝地方に前年の9月に植付け、翌年の6～8月に親株床で発生した子苗を9月24日に掘り上げた。苗はクラウン径を基準として、20mm以上の苗を大苗、15mm～20mmの苗を中苗、15mm～10mmの苗を子苗として分類した。また、定植は9月28日、10月8日の2回に分けて行ったが、10月8日定植は9月28日から10日間冷蔵した苗を用いた。

普通促成栽培及び夏期低温処理育苗による促成栽培（以下、低温処理栽培）を対照作型とした。

2. 結果及び考察

1) 花芽分化時期：検鏡による観察結果では、花芽分化時期は9月15日～20日頃と推定された。

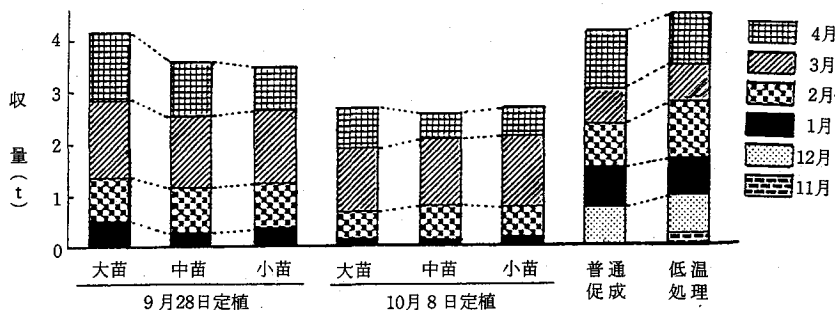
2) 生育状況：定植時期の早い9月28日定植は活着が早く、その後の生育も順調に経過した。また、苗は大苗

ほど活着が早い傾向がみられた。

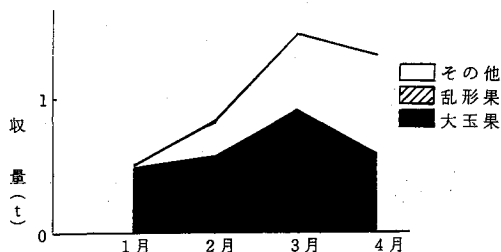
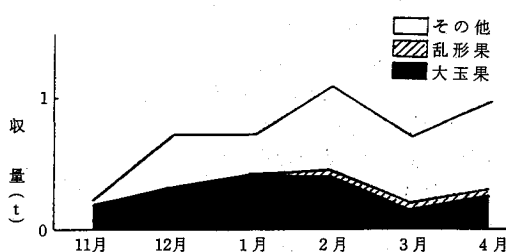
3) 月別収量：収穫開始時期は、低温処理栽培及び普通促成栽培がそれぞれ11月、12月であるのに対して、寒冷地養成苗は全て1月であった。定植時期が早いほど収穫開始時期は早まった。総収量は、10月8日定植に比べて9月28日が多かった。また、苗の大きさが収量に及ぼす影響は定植時期で大きく異なる傾向がみられ、9月28日定植では苗の大きいほど収量が多かったが、10月8日定植では苗の大きさと収量との関連がみられず、ほぼ同等の水準を示した。促成作型では3月の収量が相対的に少なかったのに対して、寒冷地苗は、3月の収量が最も多かった（第1図）。

4) 平均果重：対照の促成作型では、12～1月以降平均果重が小さく推移したのに対して、寒冷地養成苗は1月から3月までの平均果重が大きかった。

以上のことから、寒冷地養成苗を利用した無仮植栽培は慣行の促成栽培と収量パターンが大きく異なることが明らかとなった。これらの作型を組み合わせることによって、長期間にわたる安定した生産と労力分散を図ることが可能になると考えられる。



第1図 月別収量 (10a当たり)

第2図 寒冷地養成苗 (9/28定植, 大苗) の大玉, 乱形果発生割合
注) 大玉: 15g以上の整形果第3図 夏期低温処理栽培の大玉, 乱形果発生割合
注) 大玉: 15g以上の整形果